

初めに「南無妙法蓮華經」の一言ありき

「南無妙法蓮華經」といえば、一つの「言葉」であります。

ユダヤの『創世紀』^{*そうせいき}に、世の始まりが書いてあります。

その劈頭に、「初めに言葉ありき」とあります。

この「言葉」が何であるかと私に聞くならば、私は躊躇なく、

「南無妙法蓮華經」という一言であると答えるつもりであります。

「言葉は神と共にあり」「言葉は神なり」。

この「言葉」が持てる、この「言葉」が現じて人となった。

その「言葉」を持てるということが、人間の尊い所以であります。

『「初めに言葉ありき』』《ユダヤの『創世紀』について》の法話より *は32ページ参照)

日本山妙法寺 藤井日達山主法語

但行礼拝は世界平和の法則

— 熊本市の平和憲法擁護総決起大会に寄する書 —

昭和二十八（一九五三）年三月十四日

日本山妙法寺 沙門 藤井 日達

南無妙法蓮華經

弱肉強食からの人間の解放

生物一般の現象として、自ら生活せんがために、他の生物を食つて活きてゆかねばなりません。この現象を弱肉強食と名づけております。

食わる者も、食わるままに甘んずることはできません。

ここに闘争が起ります。

闘争は勝たんがためには、恐ろしき形、醜き形、敵を欺く方法や強い力を必要とします。

諸の嫌い憎ましい現象は、ことごとく闘争から生ずるものであります。

弱肉強食の場合にも、蛇が蛙を呑み、猫が鼠を噛むよりも、蛇と蛇とが争い、猫と猫とが噛み合うことは、一層悲惨であります。

ニューギニヤには、今日なお、人間が人間を食つて活きてゆく、食人種と称する種族が住んでおります。

我々は、この種族を野蛮人と呼んで、卑しみ且つ恐れております。

人間が自ら万物の最靈長と名乗り、進化のもつとも発達したるものと言わるるのも、弱肉強食の生活に成功したる所以ではなくして、かえって、これとは反対に、弱肉強食の現象から、次第に解放され、遠離して生活するが故であります。

宗教道德はここに起こつて、人間生活の崇高なる目標を示し、政治経済は崇高なるその目的を達成せんがための手段として行われるものであります。ユダヤの旧約聖書には、諸の鳥獸・魚貝は野菜と同じく、人間が食つて活きんがために作られたと書いてあります。

人間が牛を食うことも、鯨を食うことも悲惨なことではありますが、人間が活きてゆか

んがためには、やむを得ないという義理もありましよう。

人が人を食つて活きてゆくことは、彼のエホバの神も許しておりませぬ。人が人を食うこととは、エホバの神にも到底、忍び難き悲惨なことであるが故であります。

弱肉強食の現象を生物の法則とすれば、食人種の肉を食つて活くることも、冷ややかな進化論の学説からはまた、許さるる義理もありましよう。

必要でもないのに、他の専ら活きんことを求めてやまざる人間を、無惨にも殺すことは、食つて活きんがための弱肉強食のむごたらしき法則にもはげて、食人種よりも、なお幾らにも劣れる、野蛮なる現代社会の悲劇であります。

食人種の協同殺人を学んだ近代国家

食人種が、人の肉を食わんとする時は、幾人か協同して、他の一人を殺して、その肉を協同したる幾人かが寄り合つて食うというのであります。

近代国家と称するもの、すなわち主権国家、国防国家と称するものは、食人種の協同殺

人の法を学んで、最大規模に発達させたる大組織であります。

軍備というものは、人を殺さんがための技術を、専門に研究し訓練しております。

人間が彼の餌食に供せんがために、人を殺すのは悲惨ではあっても、その数にはなお制限があります。

軍隊をもって戦争を行う時には、人を殺することは無制限であります。

無制限なるのみではなく、なるべく大量に、なるべく迅速に、なるべく慘忍に、なるべく効果的に、人を殺すことを条件として、戦争は発展しつつあります。

原子爆弾は、まさにその条件を備えたものであります。

戦争の目的が、人を殺して、その肉を食わんがためでもなく、但だいたずらに大量の人を殺さんがためであるといふ今日において、いやしくも軍隊を作り、戦争に巻き込まれれば、自他共に亡び、強弱共に倒れ、結局、人間はこの地上に住むことができなくなるであろうことさえ、想像されるのであります。

戦争の莫大な利潤を獲て

アメリカのアイゼンハワー新大統領は、「原子爆弾は平和を守る武器である」と称し、ロシアのマレンコフ新首相は、「ソ連軍は一層強大になつて、戦争においては、どこにおいても、敵を敗走せしむことができる」と場所もあろうに、スターリン前首相の葬式の弔辞の中に豪語しました。

新兵器の発明も、軍備の増強も、それはやがて戦争をする道具であつて、けつして戦争をやめる道具ではありません。

ソ米両国民共に、前大戦において勝利者となりました。したがつて莫大な利潤を獲たわけであります。

戦争のこの利潤の味を占めては、戦争の危険を犯すことさえも、はなはだ勇敢になりつつあります。

いわゆる軍事的精神状態が昂進する所以であります。

双方共に、諸外国を単に仮想敵国として、その侵入や、虐殺や、掠奪や、破壊や、不道

徳やを、日夜に吹聴ふいちらうします。

かくては第三次世界大戦を避くる見込みは、まったく立ちませぬ。

もし我々が第三次世界大戦を、あらかじ止め阻止することができなかつたならば、現世げんぜ、さながら無間地獄むげんじごくの大火焰*だいかえんとなつて、人類は生きながら、激しき火炙りひあぶの極刑きよつけいに処せられねばなりませぬ。

弱肉強食の法則が発展して、我が身の安全保障に役立たず、世界の破壊、人類の滅亡めいじょうとなるならば、一身の安堵いっしんあんどのためにも、*はまたま将又世界平和のためにも、他の法則を探し求めねばなりませぬ。

人間はもはや、世界に生きておる他の何者からも、容易く殺される憂うれいはなくなりました。

ここにおいて、但だ人間が人間を殺すことさえ止めることができたならば、それで我が一身も安全であり、世界も平和になるはずであります。

人が人を殺す軍隊組織さえ作らなかつたならば、世界に大量虐殺は行わるるはずはあります。

平和は人間の崇高なる目的である

仮想敵国を仮想する代わりに、仮想天国を仮想しましよう。

人間を殺人者と疑う代わりに、人間を仮性ふつしように、神の子と信じましよう。

人間相互*きょうよに軽蔑せんめいする代わりに、人間相互に尊敬いたしましょう。

人間相互に但行礼拝たんぎょうらいはいをいたしましょう。

たとい最悪の場合、我が身が殺さるる時にも、但行礼拝をいたしましょう。

但行礼拝すれば、いかなる怨讐*えんしゆも、親密に結合する端緒*たんしよが開けます。

現代社会において、足らないものは礼拝の一行であります。

現代社会において余るものは、鬭争あまの一事であります。

科学的に、人間は鬭争しておる者と説明するかもしれませぬ。

しかしながら鬭争が現実であつても、鬭争は、けつして人間の崇高なる目的ではあります。

平和は人間の崇高なる目的であります。

* しこうして、それに到達する但行礼拝の道を教えたものが宗教であります。

いずれの宗教も、礼拝を教えぬ宗教はありません。

我々は一身の安堵を思うにつけ、世界の平和を思うにつけて、正しき宗教の門に入らねばなりませぬ。

14頁 * 供せん = 差し出す。 * いやしくも = かりそめにも。 かりにも。

15頁 * アイゼンハワー = 第三十四代米国大統領（在任一九五三～一九六一）。 * マレンコフ = 一九五三年スターイン死後、ソ連首相につく。 * あるうに = 話すべき時と所も考えずに。

* 昂進 = たかぶりすすむこと。

16頁 * さながら = そっくりそのまま。まるで。 * 大火焰 = 大きいほのお。 * 将又 = それともまた。

17頁 * 軽蔑 = 見くだし、馬鹿にすること。 * 怨讐 = うらんでかたきとすること。 * 端緒 = ものの

ごとが解決するいとぐち。

18頁 * しこうして = そして。

衆生救濟・淨土建立の一言の要法

—日本佛教僧伽ワシントン道場開堂供養之辭—

昭和四十九（一九七四）年六月五日 米国首都ワシントン道場

日本佛教沙門 藤井 日達

南無妙法蓮華經

本日、アメリカ合衆国の首都華盛頓市に、日本佛教僧伽の道場開堂の式典を挙行するにあたり、ネパール王国大使閣下、タイ王国大使閣下、バンガラデシュ大使閣下、スリランカ共和国大使館、印度大使館、ガボン大使館、英國大使館等から、大使代理の諸氏が御参詣くださいまして、はなはだ光榮に存じます。

特に、スリランカの大使館の甚深なる外護がなかつたならば、日本佛教の基礎を華盛頓に据えることは不可能でありました。

スリランカの毘波羅僧伽は、多年の間、日本の比丘の生活を保護し、その信仰修行、布教に自由を与えてくださいました。